



Title	乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン
Author(s)	高久, 慶典
Citation	makoto. 1980, 30, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン

阪大微生物病研究会

学術部長 高久慶典

ムンプス（流行性耳下腺炎・

おたふくかぜ）は発熱をともな

って耳下腺の腫脹と圧痛をもつ

た小児の急性伝染病です。春か

ら初夏にかけての流行期には幼

稚園や小学校で激しい伝染を起

し、一時学級閉鎖されることも

稀ではありません。しばしば髄

膜炎または脾臓炎を併発して重

篤になる場合もあり、そして思

春期になってから罹患すると男

子では腮腺炎、女子では卵巣炎

を起こす恐れがありこれが原因

となつて不妊症になることがあ

ります。このためワクチンの実

用化が叫ばれておりました。

ワクチン開発の経過

おたふくかぜワクチンのほぼ

完成品と見られるものができた

のは麻しんワクチンと同じ一九

六〇年代であつて、それも麻し

んワクチン研究グループと全く

同じ米国のエンダース博士、ソ

連スモロディンツエフ博士とし

て阪大微生物野博士らの研究グ

ループでした。米国ではすでに

一九六七年から麻しん・風しん

との三種混合ワクチンによって

実用化されており、ソ連でも大

量に使用されています。

ところで日本では昭和四十三

年にワクチンがほぼ完成してい

ましたので文部省、厚生省より

研究費が出て研究班がつくられ

三年間にわたり検討されたところ

副反応が少なく、かつ効果が

優れていることを確めました。

そこで昭和四十七年からは実用

化のためにムンプスワクチン研

究会がつくられ安全性と有効性

表一 微研において昭和42～48年にムンプスワクチンを接種した者の昭和51年までの罹患調査

昭和 (年)	かからなかった				かかった			不 明
	流行なし 流行の有無不明を含む	流行あり 接触の有無不明を含む	流行あり 接触あり	計	確率性 高いもの	恐らく誤	計	
42	15	9	22	46	1	0	1	0
44	44	29	33	106	0	0	0	1
45	67	45	91	203	4	2	6	2
46	77	74	88	239	3	7	10	1
47	66	47	54	167	2	3	5	0
48	97	65	51	213	1	1	2	3
総計	366	269	339	974	11	13	24	7

(大阪伝染病流行予測調査会報告)

ワクチンの効果と副反応

表は昭和五十一年にワクチン被接種者個人別家族宛通信によって、昭和四十二年から昭和四十八年までの間にワクチンを受けた者のうち罹患調査のできた

千余名についてまとめたものです。毎年かなりの流行が見られるにもかかわらず、ワクチン接種後ムンプスに罹患する者が非常に少ないことがうかがえます。特に患児と接触していてもかか

らないものが多数あることは、すぐれた有効性を示すものであります。そしてまたおたふくかぜワクチンは麻疹ワクチン同様免疫が一生続くものと考えられています。

有効性がすぐれていても、副反応が強いものであればワクチンとして失格です。おたふくかぜワクチンを接種した後の臨床反応は発熱率が3%前後で三十七・五℃から三十八・五℃の発

熱が殆んどで、しかも持続期間が一日〜二日と副反応が非常に少ないワクチンです。そして微研ワクチンは耳下腺腫もなかったことをムンプスワクチン研究会は報告しています。